

地域住民の死生観と健康自律を支える 超高齢社会創生のための文理融合プロジェクト

Interdisciplinary Project for a Community-Based Revitalization of Our Super-Aged Society That Supports Autonomous Health and with Consideration for Their Views regarding Life and Death

プロジェクトリーダー 佐藤真一(人間科学研究科教授)

学内のコアメンバー

土岐博(大阪大学名誉教授) 山川みやえ(大阪大学医学系研究科准教授) 鈴木徑一郎(大阪大学産学共創本部特任助教)

1. プロジェクト概要

私たちは大阪大学 EDGE プログラム「認知症横断プロジェクト」(2015-2018年)の活動を通じて、学内の文理各分野の研究者だけでなく、地域で認知症や超高齢社会の問題に取り組んでいる多様な人々とのつながりを作ることができました。本プロジェクトでは、このネットワークを基盤として、近隣の実践者・住民とともに活動を展開しています。

長寿社会における健康は、疾患の予防に限るわけではありません。心や社会の健康も含めて考える必要があること、そしてそれは医療・福祉の専門家や国や自治体のリードだけでは解決の困難な課題のため、地域で暮らす市民一人ひとりの事情を支えるようなボトムアップのサポートが重要な意味を持つものと考えています。

そして、何より大事なことは、当事者の意思と希望と幸福です。私たちのプロジェクトでは、超高齢社会の当事者である市民との対話によって、研究機関である大学に所属する私たちがいかにすれば課題解決に貢献できるかを考えています。

具体的な活動内容は次の通りです。

- ①大阪大学キャンパスライフ健康支援センターとともに大阪府民の健診等のデータを分析し、新しい保健指導の方法や住民の健康自律を促進するような具体的政策を提言する。
- ②近隣自治体で哲学カフェを開催し、住民の自律的な健康観や死生観を醸成する。
- ③「図書館と認知症」の集会を開催することによって、認知症をきっかけとした多世代交流のできる地域共生の拠点となる図書館を増やす。
- ④幸福な超高齢社会とは何かを考えるシンポジウムを開催する。
- ⑤超高齢社会の多様性に配慮しながら近隣自治体活動のハブになる。

⑥これらの活動への若手研究者・学生の参加を促進し、社会的課題の解決へ向かう人材を、各セクターとの協働を通じて育成する機会とする。

2. 2018年の取り組みと成果

大阪府民の健診等のデータ分析の取り組みについては、大阪府保険者協議会(大阪府設置)からの依頼を受ける形で共同研究者グループを立ち上げ、全体で約1TB(約500万人×6年間分)の膨大な量のデータの分析を開始しました。具体的には地域(市町村)ごとの医療費や介護費を導出し、また、メタボリック・シンドロームの地域分布とその症状に向かう機序を検討しました。現在は健康状態と病気の間接的関係を、特に糖尿

高齢者のみなさま
集いませんか?!

～哲学カフェのルール～
① 感じたことは何を話してもよい
② 人の話を否定しない
③ 話したくなければ話さなくてよい

日時: 2018年10月26日(金)

14時～15時半

場所: てりは包カフェ

桜井1-13-22 北部西南地域包括支援センター内

※11月は16日(金)、12月は21日(金)の開催となります。

北部・西南地域
包括支援センター

旧西国街道

桜井駅 幼稚園

ATM

申し込みはお電話で

☎ 072-737-6312

(なな-る訪問看護ステーション)

主催

なな-る

訪問看護ステーション

IP 大阪大学 redPost

参加無料

哲学カフェ チラシ

哲学
カフェ

病と認知症に着目して分析しています。

哲学カフェは、2018年4月-12月に「豊中市市民活動情報サロン」で8回、箕面市の北部西南地域包括支援センター内「てりは包カフェ」にて9回、どちらも毎月1回のペースで実施しました。高齢社会の課題に関する根源的な概念について、市民がゆっくりと思える場として「生と死」、「希望」、「美しさ」などのテーマに加えて、「大晦日」といった哲学カフェには珍しいテーマについても哲学対話が行われました。6月に箕面で開催した哲学カフェは、地元の箕面FM放送局の取材を受けました。また、2019年度は、箕面市社会福祉協議会から開催を依頼されています。

認知症にやさしい図書館へ向けての取り組みは、既存の地域資源の価値を高める活動のモデルケースとして図書館をリデザインするためのフォーラムを2回(7月7日、12月14日)実施しました。認知症をひとつの切り口に、多世代・地域交流の拠点として図書館をとらえ、医療関係者・福祉関係者・図書館職員など様々な立場の参加者が、演劇を用いたケーススタディによるコミュニケーションデザインや、実際に図書館を探索して評価する「キャプション評価」による共創空間のデザインなどのワークショップを行いながら、新しい図書館のかたちを議論しています。



哲学カフェ

心も社会も健康な超高齢社会づくり

3. プロジェクトの今後

私たちの活動の母体となった認知症横断プロジェクトでは、2年半にわたって大阪大学の多数の部局の教員・研究者による認知症談話会での研究報告が行われました。その成果の一部ではありますが、『ほんとうのトコロ、認知症ってなに?』と題した書籍として大阪大学出版会から公刊されることになりました(2019年3月出版予定)。

また、一般社団法人福祉住環境アソシエーションとの共催で第6回福祉住環境サミットを2019年3月16、17日の両日、豊中キャンパスの大阪大学会館ほかにて開催します。このサミットには、本プロジェクト代表の佐藤およびプロジェクトメンバーの山川が登場します。

2019年度は、基幹プロジェクトへの採用に向けて活動を強化すべく、基軸となるメンバーを学内外から改めて選抜することで地域のハブとなることを目指すとともに、若手研究者や学生の参加を促して、社会的課題の解決に向かう人材を育成したいと考えています。

大阪府民の健診データの分析については、早い機会に成果をまとめて大阪府に提出し、政策立案に係る私たちの健康自律に関する提案をする予定です。

また、哲学カフェや「図書館と認知症」の取り組みの成果に基づいて、幸福な超高齢社会とは何かを考えるシンポジウムやフォーラムを開催します。



「図書館と認知症」集会